



Title	錢鍾書著『槐聚詩存』を読む：其の一 楊絳との関係について
Author(s)	福井, 智子
Citation	大阪大学言語文化学. 1999, 8, p. 129-141
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78052
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

錢鍾書著『槐聚詩存』を読む

— 其の一 楊絳との関係について —*

福井 智子**

錢鍾書は現代中国の著名文学家。彼の漢詩集『槐聚詩存』は出版于 1995 年。那本詩集收入著者從二十四到八十一歲的作品共 173 首。雖然他精于廣泛的文学，可是我們透過這本詩集，就可知道他是非常愛好漢詩的。

至于這本詩集能被出版的背景当中，有一個值得注目的事实。就是他夫人楊絳替大病中的錢鍾書尽力而使詩集能完成。楊絳不能忍受錢鍾書的詩集被別人任意編修。于是不顧自己被痛折所磨，楊絳都從他的作品中選定推敲，然後用手抄的方式來，完成了這本詩集。從以前開始就一直保有，不惜一切的協助，並且希望他的作品獲得更高的評價的態度。透過楊絳富有機智的「記錢鍾書与『围城』」一文，我們可詳細的了解上述的一切。对于錢鍾書整個文芸活動來話，她是位不可缺少的人物。錢鍾書以楊絳為題材的美詩實在為多。詩情大多以對楊絳的作品的感想、贊辭為主。並在詩情中透露出他怕為了自己胡說八道的小說而傷害了她的文学名声。我們能從這些知道楊絳的文芸活動对于他來說是個好的刺激的。他斷筆小說之後，還用了詩書的形式寫了一個故事。就是為了要助長楊絳的写作計畫。

這樣兒，他們倆的雖是夫婦，但又双為文学家対等關係，這些都將使他們倆的才華更加互相提高長進。透過用旧体詩写的『槐聚詩存』作品，我們可以看出現代中国最具良識、健康的夫妻肖像。

*其一 与楊絳的關係（福井智子）

**大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程



現代中国を代表する文学者、錢鍾書（1910-1998）の詩集『槐聚詩存』は、著者二十四歳から八十一歳までの漢詩百七十三首を収める。ここで言う漢詩とは口語詩ではなく、中国の伝統的な文語による旧体詩を指す。近代中国では口語詩が出現し、それは1910年代の文学革命をへて、20年代にはほぼ定着していた。そして抗日戦、革命の激動期の中で時々の感動を簡明・率直に歌うことを主とし、人民共和国建国以後は「人民のための文学」を目指す文芸政策に乗って、着実に其の地位を高めつつあるのが現状である。しかし『槐聚詩存』に見られる錢鍾書の友人達との詩のやりとり、また様々な社会情勢に対する著者の心の叫びを綴った作品からは、依然として文語による旧体詩が知識人の間で、重要な表現形式であることを知らされる。

ところで漢詩には、詩を作る人々の交友関係を支えるという性質が、他の文芸形式に較べて顕著に見られる。それは詩作そのもの、及び詩に読む題材に共通の価値意識を持たせ、それを仲間同士で確認しあう様子に見て取れる。上述したように、『槐聚詩存』に収められる作品にも、漢詩を介して展開された錢鍾書の交友関係の軌跡がたどれる。其の一例として、1939年の「雜書」という作品の四首目をここに挙げてみる。

性本愛朋侶

畏熱罕詣人

褊褊程所嘲

剝啄韓亦嘖

好我二三子

相望不得親

徐燕謀郭晴湖擅詞翰

陳彝式圭亦軼群

近隣喜冒郎叔子

璠也洵魯璠

折簡酬新涼

茗碗共論文

性 本より朋侶を愛す

熱を畏れ 人を詣でること罕なり

だいたい褊褊 程 嘲る所

はくたく剝啄 韓 亦たいか嘖る

好し 我が二三子

相望むも親を得ず

徐燕謀と郭晴湖とは詞翰をほしいま擅にし

陳彝式圭亦た群を軼す

近隣 冒郎叔子を喜ぶ

璠也 洵に魯の璠

折簡 新涼に酬い

茗碗 共に文を論ず

この詩には徐燕謀、郭晴湖、陳式圭、冒叔子といった、錢鍾書の友人の名が見られる。詩の中で語られているように、これらの面々は皆、漢詩を好んで作り、其の出来映えを競い、批評し合う仲であった。茶をすすりながら（「茗碗」）詩を論じ合う雰囲気は、蘇軾、黃庭堅といった宋代の士大夫たちの華やかな社交の風景を連想させるものがある。事実『槐聚詩存』には、錢鍾書がこれらの各友人に対して作った作品が数多く収録されている。また錢鍾書は徐燕謀と冒叔子の詩集には序を、郭晴湖の詩集には題を書いていることから、著者とこれら友人間が、漢詩を通じて固く結ばれていた事がわかるのである¹⁾。

このように『槐聚詩存』を読むことは、伝統的な旧体詩を自由に作りこなせる技量で結びついた、近、現代期における中国知識人の交流の様子を知る手がかりとなるのである。それに注目することは、小説『圍城』に対する研究は多いものの、その作詩についてはまだ十分語られていない錢鍾書の、新しい側面を見いだすことを可能とし、かつ近現代期の中国文学史における、旧体の漢詩の実態を明らかにすることができると思われる。そこで筆者はこれより先、『槐聚詩存』を中心とし、錢鍾書と其の友人達に注目し、その交流範囲を明らかにすることを最終目標に置き、研究を進めることを考える。其の第一歩として、今回の論文では、錢鍾書にとって最も身近で最大の協力者である夫人の楊絳（1911-）を取り上げていきたいと思う。

二

『槐聚詩存』を読むに当たり、他の友人を差し置いて楊絳をまず第一に取り挙げるには、一つの理由がある。それは楊絳が『槐聚詩存』の成立、出版に対し、とりわけ重要な役割を果たしていた事実からである。詩集の序文には、次のように記されている。

「…去年余大病し、絳亦た勞を積みて疾を成し、哀弊の余生、而るに或いは余の流伝する篇什を以て印して一書と為し、薄利を牟ほる者たらんと欲す。絳余に謂いて曰く：「君と皆風燭草露の如し、宜しく自らの詩集を定め、俗本の訛りを伝うるを免れしむべし」と。因りて余の選定推敲を助け、並びに疾を力めて手写す。…」

¹⁾『晴湖詩稿』（郭晴湖作）、『徐燕謀詩草』（徐承謨作）、『邛都集』（冒孝魯作）

錢鍾書は大病を煩っていた。そして高齢であるため、もはや余命幾許かも定かではない。だから絳、つまり楊絳は言うのであった、せめて生きている間に、自ら納得のいく詩作を集め、他人の手による選集の間違いや不本意な点を正すべきだと。そして楊絳は自らも看病の疲れからくる病に侵されていたにもかかわらず、詩集の編集に協力し、それを手書きで仕上げた、という内容なのである。

楊絳も錢鍾書同様、現代中国の著名な文学者である。『ドン・キ・ホーテ』等スペイン文学の翻訳、家族や知人に関する随筆、そして長短の小説と戯曲など、数多くの優れた作品で知られる。清華大学で錢鍾書と出会って以来、イギリス、フランスへの留学、日中戦争、その後の中国社会の大変動を、常に錢鍾書と共に経験してきた。強い正義感とユーモアを持つ人格、そしてあふれんばかりの文才を兼ね備えた楊絳こそ、詩人として、また小説家としての錢鍾書を支え、その資質を最大限にまで引き出した人ととらえることができるのである。それは錢鍾書自身、深く自覚していることであり、作品に詠まれた楊絳の姿にそのことは反映されている。以下、楊絳に関する詩をいくつか鑑賞し、並びに楊絳の散文作品を参照しながら、その中に二人の交流の様子を追ってみたいと思う²⁾。

三

1935年、著者25歳の時の「秣陵雜詩」は、七言絶句八首の連作である。当時著者は「秣陵」今の南京にいて、楊絳と離れて生活していた。そんな中、ある春もまだ浅い日、「絳書来言春遊塞外」楊絳から国境にピクニックに行ってきたと言う手紙が届いた。それに対して錢鍾書は、以下のような詩を詠んだ。

桃李氷霜憐頰渦
知窮絶塞走明駝
归来抖擻泥沙障
与我京塵較孰多

桃李の氷霜 頰渦を憐む
知んぬ 絶塞を窮めんとして明駝を走らす
帰り来たりて 泥沙の障を抖擻す
我が京塵と較べ 孰れか多き

美しい桃李のようで、また氷霜のように高潔なあなたの、そのえくぼ（「頰渦」）

²⁾ 楊絳の漢詩作品については、現在発表されたものは無い。よって本論文では、錢鍾書の漢詩作品のみを扱う。

をいつくしむ。あなたが、まるで千里をも駆ける駱駝に乗り、国境まで行きつくと、勇んで出かけた姿が思われる。家に戻れば、衣服についた砂埃を払うだろうが、それは私にまわりつく南京の塵と、どちらが多いことであろうか、という内容である。楊絳の容貌を讀える「桃李氷霜」は、また凍て付くような寒さを残す野山の寂寞とした風景描写とも重ねられる。離れて暮らす中で、相手を思う気持ちがいよいよ深く、より純粹であることを願う著者の思いであろう。著者と楊絳はこの年に結婚している。

翌年 1936 年の作品には、結婚生活の一場面を描いた、次のようなものがある。

贈絳	絳に贈る
捲袖圍裙為口忙	袖を捲き 圍裙 ^{いくん} 口の為に忙し
朝朝洗手作羹湯	朝朝手を洗いて 羹湯 ^{こうとう} を作る
憂卿煙火熏顔色	憂える 卿が煙火 顔色を熏 ^{くす} ぶ
欲覓仙人辟穀方	覓 ^{もと} めんと欲す 仙人 ^{へんじん} の辟穀の方

袖を捲り、エプロン姿（「圍裙」）の楊絳は、私の食事の為に忙しく働く。毎朝手を洗っては、スープ（「羹湯」）の支度をする。そんなあなたが、煙で顔を熏すのを、わたしは憐れむばかりだ。食べ物を食べずともすむ仙人の術を得ることができれば、あなたを煩わさずにすむのだが。ユーモアを交えつつ若妻を気づかう、そんな著者の姿が目につく作品のひとつである。二句目について言えば、著者が幼い頃から愛読してきた『唐詩三百首』に収められる、王建の「新たに嫁せる娘」にほぼ同じ句が見られる³⁾。王建は機知に富みながらも、不安気一杯な新婦の様子を実にいきいきと描いている。銭鍾書が作詩の際にこの詩を意識したことは、確かと思われる。

銭鍾書と楊絳は結婚してまもなくの 1935 年にイギリス、フランスへ留学し、1938 年に帰国した。帰国後すぐ、銭鍾書は清華大学に教授として招聘される。当時の清華大学は西南聯合大学と合併して昆明にあった為、まずそこに一人行くことになった。また、父親の錢基博（1887-1955）が湖南の国立師範学院の創立に関わっていたことから、後に湖南の方へ行く。そのような事情から数年間、著者は上海にいる楊絳と離れて生活するのであった⁴⁾。その間に作られた、「昆明

³⁾ 王建「新嫁娘」：「三日入厨下、洗手作羹湯。未諳姑食性、先遣小姑嘗」

舎館作」(1938)や、「昆明を發す、絳に電報す」「月に対す、絳に同ず」(1939)「絳の書來たりて云う、三齡の女、書を学ぶ、今隸の朋の字を見て、曰く、此兩月相^{なれした}昵しむ、と。劉安の事を喜憶して詠を成す」(1940)などからは、離れて暮らすわびしさの吐露、それを紛らわすために、子細に連絡を交わした跡が見られる。

錢鍾書は、楊絳の自分に対する細やかな気配りを愛し、高潔な人柄を称える。それが楊絳に対する、いたわりをこめた優しい感情となり、詩に余すことなく表現されている。この楊絳への感情の、後も変わることなく続く様子は、詩集中の後半に収められた作品にも多く見ることができる。その一つに「偶々二十六年前、絳が為^なに書きし所の詩冊を見、電謝波流、塵に似て夢の如し、復た十章を書す」(1959)がある。これは自らの文学活動に一つの転機を経た著者が、これまでの楊絳と自分の私生活、及び文芸活動について振り返る内容で、錢鍾書の楊絳に対する感情が最もはっきりと語られる作品である。

一方楊絳もまた、錢鍾書の人格と豊かな才能に対し、相当深い愛情と尊敬の念を抱いている。残念ながら楊絳が錢鍾書に送った漢詩は現在の所発表されていないが、漢詩という形式から彼女の感情を読むことはできない。しかし彼女の他の著作の随所に、それを見いだすことは可能である。中でも「錢鍾書と『困城』」(1985)の一文が圧巻であろう。これは錢鍾書の長編小説『困城』⁵⁾の愛読者に対し、その書の構成と登場人物のモデルについて、そして作者錢鍾書に関しての、「注釈」というスタイルをとる。経書を中心とした、古書の考証学が盛んな中国学术界の一面を思わせ、楊絳の知的なユーモアがさえた作品と言える。そこでは錢鍾書の詩作についても多く触れており、錢鍾書と漢詩の緊密な関係を語る。とりわけ先に挙げた「偶々二十六年前、…」の詩については、この「錢鍾書と『困城』」を有効な「注釈」として活用できる部分がある。よって以下、両作品を合わせて読んでみることにする。

この作品は、著者49歳の時に詠まれたものである。著者は偶々26年前に、楊絳の為に書いた詩を目にし、それまでの時の流れの、あまりにも早かったことに感慨深くなる。そしてここで新たに十首の作品を書く、と詩の題で言う。その第一首目は、次の様である。

4) 「記錢鍾書与『困城』」を参照

5) 邦題『結婚狂詩曲』(荒井健、中島長文、中島みどり訳、岩波書店 1998)

廿載猶勞好護持
氣粗語大旧吟詩
而今律細才偏退
可許情懷似昔時

廿載 猶お勞す 好く護持するを
氣粗にして語大なり 旧吟の詩
而今 律は細なれども 才は偏^{ひと}えに退く
許すべけんや 情懷 昔時に似たるを

二十年間、なおよく私を支える為に、あなたを煩わせてきたものだ。その中で私が詠んできた昔の詩はというと、気は荒々しく、語句は大げさなものばかり。今になってようやく詩形は細やかになってきたのだが、詩才の方は偏^{ひと}えに衰える一方だ。しかしあなたへの思い（「情懷」）が、昔時と変わらないことは認めてほしい、という。十首の連作の初めで、著者はまず楊絳に対する気持ちに、少しも変化のないことを表明するのである。そして作品は、二人の若い時分から順に説き起こして進む。

第四首目は、1938年に結婚した二人の門出を詠む。そのなかに楊絳について「此より書を繙き、筆を拈みし外に、柴米を料量し、当家を学ぶ」という句がある。楊絳はそれまで、清華大学で専ら文学に打ち込んでいた。それが結婚によって家庭に入り、慣れない家事に取り組まなければならなくなったことを言う。才女が家庭の経営に煩わされることを、いささか気づかう気持ちが込められているのである。

錢鍾書は、楊絳の「才女」ぶりを愛してやまない。第五首目では、自分の読書に耽る癖を楊絳があきれる様子に対して、

偏生怪我耽書癖
忘却身為女秀才

偏^{あいにく}生 我が耽書の癖を怪しむ
忘却す 身は女秀才為るを

と、少し戯れを交えて切り返す。あなたこそ文学研究に専念する女秀才であるくせに、そのことをすっかり忘れて人のことをとやかく言うのか、と。また第六首目では、楊絳の作った戯曲について、

世情搬演栩如生
空際伝神着墨輕

世情を搬演するは 栩^くたること生けるが如し
空際に神を伝えて 着墨輕し

と、その作品が世の人々の事情をどれほど良く映し出しているか、またその描き

出す筆致の軽やかさを言うのである。楊絳は1940年代、諷刺とユーモアの利いた喜劇を書いていた。1943年の春に上海で上演された喜劇『称心如意』は、大変好評であった。そしてこのような楊絳の創作活動は、錢鍾書を小説執筆に向かわせることになる。

1941年、湖南から上海に戻ってきた錢鍾書は、この地に閉じ込められて出られなくなった、と「錢鍾書と『围城』」は言う⁶⁾。それは、真珠湾事変が勃発し、上海が日本軍の包囲下に入ってしまったからである。この時錢鍾書は仕事を失い、楊絳の父親である楊蔭杭（1878-1945）から譲ってもらった大学での教職で、一家は何とか生活をつないでいた。そのような苦しい生活の中、ある日楊絳の書いた話劇の上演を見て帰宅した錢鍾書は、突然、長編小説の執筆を思い立つ。楊絳はそれに大喜びし、彼に急ぐように促す。錢鍾書にとって、小説を書くことと仕事をするのが両立できるかどうかは不安であった。しかし楊絳は、錢鍾書に教職の時間を減らしてでも執筆することを勧める。それまで人を雇って任せていた家事の一切を自分が引き受け、家計を切り詰めるとまで進言したのである。錢鍾書が小説を書く為なら、自ら「飯炊き婆さん」にでも望んでなると言う楊絳の奮闘により、『围城』は1944年に執筆が開始され、1946年に完成した。その内容は、見栄と欲望にあがく愚かなインテリが、ただ「結婚」という非日常性だけに憧れて飛びつき、結局は破局に終わるという、諷刺の利いた人間悲喜劇である。それは多くの読者に親しまれ、大変評判になった。錢鍾書は第七首目でこの小説と楊絳について触れ、次のように言っている。

荒唐満紙古為新
流俗従教幻認真
悩殺声名縁我損
無端説夢向痴人

荒唐たり 満紙 古を新と為す
流俗 幻を真と認むるに従^{したが}かす
悩殺す 声名 我に縁りて損ずるを
端^{はし}無くも夢を説き 痴人に向かう

小説『围城』のどの頁もその内容は、古いことを新しいとするようなでたらめ（「荒唐」）に満ちている。そして世の人（「流俗」）が、それらでっちあげを真と認めることをかまわずにはっておいた。けれどもこのでたらめな小説を書いた私の為に、あなたのこれまでの業績に対する評判が傷つくのでは、と悩まされる。思い

⁶⁾ 注4 上掲書

もよらず、私はたわごとを愚かな読者に説くことになってしまった、と言う。またこの詩には「余圉城を出版す、痴人夢を説く者頗る多し」と註が付けられている。

自らの作品について、自嘲することの激しい著者であるが、それが予想外の評判を博し、しかも愛読者たちに小説の内容を作者にまつわる事実と勝手に解釈されてしまい、戸惑いが隠せないのである。また、小説の完成に協力してくれた楊絳がこの小説のために、却って名声を落とすことになるかもしれない、と心配する。しかしそれは杞憂であったであろう。事実「錢鍾書と『圉城』」の一文は、そういった読者に対して書かれた、作者と作品についての弁明であった。けれどもそれは結果的には、楊絳の名作の一つとなったのである。

このようにどんな題材でもすばらしい作品に仕上げてしまう、そんな豊かな発想力を持った楊絳のことを錢鍾書は、

拈出夭韶余態在
恰如詩品有都官

ようしょう ねんしゅう
夭韶を拈出して 余態在るは
あなか とかん
恰も詩品に都官有るが如し

と第八首目に言う。美しい作品（「夭韶」）をひねり出した後も、あなたはまだ美しきアイデア（「余態」）を内に秘めている。あたかもその作品の品格は、「都官」と言う位にあった梅堯臣の持つ、あの品格を有しているかのようだ、と。梅堯臣の持つ詩の品格とは言えば、それは歐陽脩に「譬えば妖韶の女の、老いて自のずと余態在るが如し」と、あでやかな女性が年を重ねて持つ色気に例えられたものである⁷⁾。楊絳の作品に、そんな成熟された味わいが感じられると言うのである。それは、第十首目に「書を繙き茗を賭けて相い老いに従う、安穩堅牢として此の身を祝す」と言うように、二人の関係が平穩で仲むつまじく老いに向かうことから得られたものであろう。けれども実際、様々な社会運動と改革の繰り返しの波に揉まれる状況にあって、とても平穩無事というわけではなかったのである。

「錢鍾書と『圉城』」には、錢鍾書が1957年、『宋詩選註』を脱稿した直後に、その書と当時の社会情勢を詠んだ詩が三首引用される⁸⁾。そして詩の解説に、錢鍾書が自らまだ創作の才があると信じているにもかかわらず、研究と評論の仕事

⁷⁾ 歐陽脩「水谷夜行」の第七、八句「譬如妖韶女、老自有餘態」

⁸⁾ 『槐聚詩存』「赴鄂道中」（1957）五言絶句五首中の三首を引く

しか満足にできず、新たな創作活動をほぼ諦めてしまったことが指摘されている。1957年から翌年にかけては、「反右派闘争」期に当たる。これよりしばらく、中国知識人はその表現に、多大な規制を強いられることになった。事実、錢鍾書は二度と小説を書くことはなく、また詩集中に収められた作品の数もこの頃より急激に減っている。まさに楊絳のいうように、錢鍾書は口を「噤^{つぐ}ん」でしまったのである。しかし『槐聚詩存』の作者は、「世を憂え生を傷む」鍾書である」と楊絳が言うように、漢詩は作り続けていた⁹⁾。そして先に挙げた「偶々二十六年前、…」には、自らと楊絳の創作活動や楊絳の豊かな才能について語ることが実に多く、著者の創作へのこだわりの、相当なる強さを感じさせる。小説を書かない理由はその当時の社会状況にもあったが、むしろ自らの才気の衰えにより、後悔を残すような作品を作りたくないという、高い自尊心こそが強く作用していたのではないか。漢詩の題材として、他人の作品を読み、それを批評するものは多い。そして錢鍾書にもこの種の作品は多く見られる。しかし批評すると言っても、それは漢詩という形式をとっていることから、やはりれっきとした創作活動の一つなのである。だからこれより以後、研究や評論を専らとする錢鍾書ではあったが、数は少なくとも漢詩は作り続けたのである。漢詩には後悔するような作品を残すことはない、という強い自信があったことの表明とも言えよう。よって小説こそ書かなかったものの、錢鍾書は後に詩の形式で、ひとつの「物語」を作ることを試みたのである。それは『槐聚詩存』の最後を飾る作品で、楊絳の依頼によって作られたものであった。

四

1991年、著者81歳の時に作られた「代擬無題七首」には、楊絳の筆による「縁起」序言がある。それによって作品制作に至ったいきさつを知ることができる。内容をかいつまんで言えば、以下のようなになる。まず楊絳が錢鍾書に自ら執筆を計画する小説中の登場人物について、詩を作ってくれるように頼む。錢鍾書はそれを断る。しかしかつて錢鍾書は小説『閒城』の中に用いる為に、ある西洋の詩の翻訳を楊絳に依頼したことがあった。しかも小説の流れから、できるだけ稚拙なものに仕上げるように、という注文を付けていた。そのことを引き合いに出し、

⁹⁾ 注4上掲書

楊絳は自らの要求を迫ったのである。自分が今求めているのは、「典雅なる篇章」なのである、断る理由などないではないか、と。そこで錢鍾書はようやく詩の制作を受けることを決意する。そして楊絳から「人物離合」極まる小説の概要を聞き出し、一か月後に七首の詩を作り上げた。その詩はもはや小説を書かずともその内容を十分言い表すような、大変すばらしい出来栄え（「絶妙好辞」）であり、楊絳は大いに満足した、と序は結んでいる。つまりこれは、二人の共作とも言えるのである。詩全体は七首からなる連作で、その形式は第一首目のみ六言古詩で、他は皆七言律詩である。楊絳の言う「人物離合」のストーリーの中、第二首目を挙げてみることにする。

風裏孤蓬不自由
住応無益況難留
匆匆得晤先憂別
汲汲為歡轉賺愁
雪被氷床仍永夜
雲階月地忽新秋
此情徐甲憑伝語
成骨成灰恐未休

風裏の孤蓬 自由ならず
住するは応に益無かるべく 況や留り難きをや
匆匆^{そうそう}として晤を得て 先ず別れを憂い
汲汲^{きき}として歡を為して 轉^{うた}た愁^えを賺る
雪被 氷床 仍お 永夜
雲階 月地 忽ち 新秋
此の情は 徐甲の語を伝えるに憑りて
骨と成り灰と成れども 恐らく未だ休まず

風に飛ばされるよもぎのように、この身は自由ではない。じっとしていても無益だが、ましてやどうして留まることができようか。慌ただしく（「匆匆」）会ってはまず別れを心配し、時間を惜しみながら（「汲汲」）出合いを欲び、別れの愁いを増やすのであった。第五句は長く冷たい夜を言い、第六句は秋の訪れを言う。両者は孤独でせつない心の比喩である。自分ではどうすることもできない此の気持ちちは、まるで老子に未払いの給金を催促し、その為老子の怒りに触れて骸骨にされてしまった「徐甲」という名の下男の執念のごとく、休むことなく続くのだ¹⁰⁾。

小説のストーリーは、恋愛感情が生まれ、それは付かず離れずを繰り返しつつも成就されず、そして悶え苦しみながら老いに向かうという形で結ばれる。詩全体を通して読めば、物語が実に鮮やかに浮かび上がっていることがよくわかる。

¹⁰⁾『神仙伝』『老子』：「老子有客徐甲、少貨于老子、約日贖百錢、計欠甲七百二十萬、甲見老子出關遊行、速索償、…」

ここに、小説の形で発揮されず、長く抑圧された錢鍾書の創作意欲が噴出されたと言えるだろう。しかもそれは『圍城』執筆開始と同様、またもや楊絳が引き金となっていたことに注目されるのである。

五

それでは『槐聚詩存』が伝統的な詩形に乗せて我々に伝えたものは何であったか、ここで考えてみたい。まずそれは、文学者錢鍾書にとって、旧体詩を作りこなせる自らの才能の表明と言えよう。中国の伝統上、知識人は常に社会全体の良識であることを使命としてきた。その中には文化、芸術面の担当者であることも含まれ、とりわけ文学においては、高度な古典知識を要する作詩の才が必須条件であった。近世以降、西洋の様々な文学形式が紹介され、それらが従来の文学観に少なからぬ影響を及ぼしたことは、文学革命などの歴史的事実が証明している。しかしそれでも伝統的な教養人的資質というものは、今なお絶大な尊敬を受ける対象であり続けているのである。だから文学を事とする者として、正統な知識人であることを示すには、やはり豊かな古典知識を必要とする漢詩の才が重視されるのは、当然と言える。且つ古い因習にとらわれない、開明的な気質も持ち合わせていると表明しなければ、現代を生きる知識人としては不十分である。そこで夫婦関係という、ごく身近で切実な事柄を詩のテーマに取りあげ、その中で今日の中国で最も良識的な夫婦像を示すことは、かなり効果的だと言えよう。しかもそこには、何ら押しつけがましさを感じさせない。それはこれまで見てきたように、錢鍾書と楊絳の間に、双方に対する絶大な信頼と尊敬が存在しているからなのである。

『槐聚詩存』に見られる錢鍾書と楊絳の関係は、単に仲むつまじいおしどり夫婦（「鴛鴦」^{えんおう}）と言うだけに止まらない。それは「錢鍾書と『圍城』」も合わせて見ればわかるのだが、両者の間には常に、互いの創作に重要なインスピレーションを与える関係が存在していたからである。まずそれは、書を読み、文や戯曲を書くことを得意とする楊絳が、錢鍾書の詩のなかで、夫と対等に渡り合う力強い女性として、非常に印象的なテーマとなっていることに明らかである。そればかりか、そもそも錢鍾書の重要な作品の制作や出版には、楊絳の協力を欠くことが出来なかったことも事実である。一方楊絳は錢鍾書の功績を高めることを我がことのように喜びつつ、著者とその著作にまつわるエピソードを用い、一名文を書

き上げている。これらは皆、両者が共に文筆を事とし、互いにその才能を深く認め合う関係があったからこそ実現したのである。

このように、互いの豊かな人間性、及び文学的資質に絶対的な信頼を寄せ合う錢鍾書、楊絳夫妻の存在が、漢詩を介して結ばれた中国知識人社会の一角を担っていると言えるのである。

使用テキスト

錢鍾書『槐聚詩存』（生活・読書・新知三聯書店 1995）

主要参考文献

『錢鍾書伝』 孔慶茂撰 （南京江蘇文芸出版社 1992）

楊絳「記錢鍾書与『围城』」（『楊絳散文』浙江文芸出版社 1994）

（日本語訳：中島みどり「錢鍾書と『围城』」『お茶をどうぞ—楊絳エッセイ集—』平凡社 1998）

「錢鍾書先生を囲む懇談会」（『颶風』第十三号 1981）

吉川幸次郎『宋詩概説』（岩波書店 1962）

吉川幸次郎「中国の知識人」『詩文選』（講談社文芸文庫 1991）

深澤一幸『唐詩三百首』（角川書店 1989）